

『漱石作品論集成』書誌（六）

まえがき

本稿は一九九〇（平成二）年十二月から一九九一（平成三）年十二月にかけて桜楓社（おうふう）より刊行された『漱石作品論集成』（玉井敬之監修 全十二巻、別巻一）収録論文の文献書誌の補遺編である。『漱石作品論集成』は主に一九三五年以降の漱石研究の成果を主要作品別に配列したものであり、漱石研究の達成を示す基本文献の一つとして現在では学界での評価も定着していると言えよう。同書には別巻を含めると三四一編もの論文及び漱石関係記事（他に企画・編集委員による鼎談十二・解説二）が収録されている。

本書誌においては『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』に収録された野田九浦『坑夫』挿絵並びに名取春仙『三四郎』挿絵に係わる書誌事項を記載した。

なおこれまでに発表した『漱石作品論集成』関係の文献書誌を以下に掲げる。

村田好哉

一、『漱石作品論集成』総目次

「大阪産業大学論集」人文科学編 第78号 41～58頁 大阪産業大学学会 '93（平成5）年3月10日
↓『国文学年次別論文集近代2平成5（1993）年』収録
『漱石作品論集成』総目次 36～45頁 学術文献刊行会編
朋文出版 '95（平成7）年6月

二、『漱石作品論集成』書誌（二）

「大阪産業大学論集」人文科学編 第81号 27～50頁 大阪産業大学学会 '94（平成6）年3月10日
↓『国文学年次別論文集近代2平成6（1994）年』収録
『漱石作品論集成』書誌（一） 88～100頁 学術文献刊行会編
朋文出版 '96（平成8）年9月

三、『漱石作品論集成』書誌（二）

「大阪産業大学論集」人文科学編 第82号 1～25頁 大阪

産業大学学会 '94 (平成6) 年6月10日
 ↓『国文学年次別論文集成近代2平成6 (1994) 年』収録
 『漱石作品論集成』書誌 (二) 100～112頁 学術文献刊行会編
 朋文出版 '96 (平成8) 年9月

四、『漱石作品論集成』書誌 (三)

『大阪産業大学論集』人文科学編 第83号 49～73頁 大阪
 産業大学学会 '94 (平成6) 年9月30日
 ↓『国文学年次別論文集成近代2平成6 (1994) 年』収録
 『漱石作品論集成』書誌 (三) 113～125頁 学術文献刊行会編
 朋文出版 '96 (平成8) 年9月

五、『漱石作品論集成』書誌 (四)

『大阪産業大学論集』人文科学編 第106号 11～23頁 大阪
 産業大学学会 '02 (平成14) 年2月28日
 ↓『国文学年次別論文集成近代2平成14 (2002) 年』収録
 『漱石作品論集成』書誌 (四) 97～103頁 学術文献刊行会編
 朋文出版 '04 (平成16) 年12月

六、『漱石作品論集成』書誌 (五)

『大阪産業大学論集』人文科学編 第107号 1～12頁 大阪
 産業大学学会 '02 (平成14) 年6月20日
 ↓『国文学年次別論文集成近代2平成14 (2002) 年』収録

『漱石作品論集成』書誌 (五) 105～111頁 学術文献刊行会編
 朋文出版 '04 (平成16) 年12月

『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』
 野田九浦 『坑夫』挿絵

『坑夫』挿絵五十六枚は「大阪朝日新聞」(大阪朝日新聞社) 第九二六七号、一九〇八(明治四十一年一月一日)「水曜」から同第九三三二号、一九〇八(明治四十一年二月二十五日)「火曜」にわたり連載された『坑夫』(二)～(五十六)に毎回掲載されたものである。ちなみに『坑夫』の連載そのものは、同紙に同年の四月六日「月曜」まで全九十六回にわたって続けられた。なお同時期に「東京朝日新聞」に連載されていた『坑夫』(二)～(五十六)「第七六七五号」第七七三〇号、東京朝日新聞社、一九〇八(明治四十一年一月一日)「水曜」～二月二十九日「土曜」には挿絵は掲載されていない。ちなみに「東京朝日新聞」への連載そのものは、同年の四月六日「月曜」まで全九十一回にわたって続けられた。

↓『夏目漱石遺墨集別冊』収録 漱石の新聞小説題字カット
 挿画一覽 49～69頁 坑夫 55～58頁 石崎 等・中島国彦・芳賀 徹・紅野敏郎・内田道雄・古川 久著 求龍堂
 '80 (昭和55) 年3月25日
 ↓『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』収録「坑夫」

挿絵」①⑤⑥ 47頁下段～53頁 堀部功夫・村田好哉編
桜楓社 '91(平成3)年12月10日

↓『漱石新聞小説復刻全集第二巻坑夫』収録 坑夫(一) (五十六) 8～189頁 監修者山下浩 ゆまに書房 '99(平成11)年9月24日 なお同復刻全集(ゆまに書房)では「東京朝日新聞」掲載本文の復刻がなされているが、あわせて「大阪朝日新聞」版に掲載された挿絵やロゴ(デザイン化されたタイトル文字)等についても復刻がなされている。

本書誌では『坑夫』挿絵に関する書誌事項を①「大阪朝日新聞」、②『夏目漱石遺墨集別冊』(求龍堂)、③『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』(桜楓社)、④『漱石新聞小説復刻全集第二巻坑夫』(ゆまに書房)について以下掲げる。なお初出紙である①「大阪朝日新聞」については各回冒頭の九字分を参考までに記した上で、必要な書誌事項を掲げた。②については ↓遺墨集、③については ↓集成、④については ↓ゆまに版 と各々略記した上で、挿絵の再録状況を明らかにするために当該の章の数字及び挿絵掲載のページ数を各末尾に掲げた。また利用者の便宜を図るために④『漱石全集第五巻坑夫・三四郎』(岩波書店、一九九四「平成六」年四月十一日)の該当する章及びページ数を ↓岩波版 と略記した上で掲げた。

坑夫(一) さつきから松原を通 「大阪朝日新聞」 第九二六七号 (二十一)面 大阪朝日新聞社 '08(明治41)年1月1日「水曜」 ↓『夏目漱石遺墨集別冊』 求龍堂 坑夫(1) 55頁 ↓『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』 桜楓社 「坑夫」挿絵① 47頁 ↓『漱石新聞小説復刻全集第二巻坑夫』 ゆまに書房 坑夫(一)挿絵 6頁 ↓『漱石全集第五巻坑夫・三四郎』 岩波書店 坑夫一 3～5頁

坑夫(二) 其の上こんな事を気 第九二六八号 (十)面

1月2日「木曜」 ↓遺墨集(2) 55頁 ↓集成② 47頁 ↓ゆまに版(二) 7頁 ↓岩波版二 6～9頁

坑夫(三) 只暗い所へ行きたい 第九二六九号 (五)面

1月3日「金曜」 ↓遺墨集(3) 55頁 ↓集成③ 47頁 ↓ゆまに版(三) 11頁 ↓岩波版三 9～11頁

坑夫(四) 「御前さん、働く了 第九二七〇号 (六)面

1月4日「土曜」 ↓遺墨集(4) 55頁 ↓集成④ 47頁 ↓ゆまに版(四) 12～13頁 ↓岩波版四 12～14頁

坑夫(五) 「全体どんな仕事な 第九二七一号 (八)面

1月5日「日曜」 ↓遺墨集(5) 55頁 ↓集成⑤ 48頁 ↓ゆまに版(五) 13頁 ↓岩波版五 14～17頁

坑夫(六) 正面に駄菓子を載せ 第九二七二号 (五)面

1月6日「月曜」 ↓遺墨集(6) 55頁 ↓集成⑥ 48頁 ↓ゆまに版(六) 15頁 ↓岩波版六 17～20頁

坑夫(七) 今度は「一つ、どう 第九二七三号 (四) 面

1月7日「火曜」→遺墨集(7) 55頁→集成⑦ 48頁→ゆま

に版(七) 16頁→岩波版七 20→23頁

坑夫(八) 一種特別な笑ひ方を 第九二七四号 (八) 面

1月8日「水曜」→遺墨集(8) 55頁→集成⑧ 48頁→ゆま

に版(八) 18→19頁→岩波版八 23→26頁

坑夫(九) 要するに此のかみさ 第九二七五号 (八) 面

1月9日「木曜」→遺墨集(9) 55頁→集成⑨ 48頁→ゆま

に版(九) 20頁→岩波版九 26→28頁

坑夫(十) 何でも此の時の自分 第九二七六号 (四) 面

1月10日「金曜」→遺墨集(10) 55頁→集成⑩ 48頁→ゆま

に版(十) 22頁→岩波版十 29→31頁

坑夫(十二) 何しろ先方で此の位 第九二七七号 (八) 面

1月11日「土曜」→遺墨集(11) 56頁→集成⑪ 48頁→ゆま

に版(十二) 24頁→岩波版十一 31→35頁

坑夫(十二) 実を云ふと自分は相 第九二七八号 (八) 面

1月12日「日曜」→遺墨集(12) 56頁→集成⑫ 48頁→ゆま

に版(十二) 26頁→岩波版十二 35→37頁

坑夫(十三) そこで自分は此の入 第九二七九号 (五) 面

1月13日「月曜」→遺墨集(13) 56頁→集成⑬ 48頁→ゆま

に版(十三) 29頁→岩波版十三 37→40頁

坑夫(十四) 自分は停車場の入口 第九二八〇号 (八) 面

1月14日「火曜」→遺墨集(14) 56頁→集成⑭ 49頁→ゆま

に版(十四) 31頁→岩波版十四 40→44頁

坑夫(十五) 夫から二人でベンチ 第九二八一号 (四) 面

1月15日「水曜」→遺墨集(15) 56頁→集成⑮ 49頁→ゆま

に版(十五) 33頁→岩波版十五 44→46頁

坑夫(十六) 自分はどう云ふもの 第九二八二号 (八) 面

1月16日「木曜」→遺墨集(16) 56頁→集成⑯ 49頁→ゆま

に版(十六) 35頁→岩波版十六 46→49頁

坑夫(十七) それから、とうく 第九二八三号 (四) 面

1月17日「金曜」→遺墨集(17) 56頁→集成⑰ 49頁→ゆま

に版(十七) 37頁→岩波版十七 49→52頁

坑夫(十八) 寝ると急に時間が無 第九二八四号 (四) 面

1月18日「土曜」→遺墨集(18) 56頁→集成⑱ 49頁→ゆま

に版(十八) 39頁→岩波版十八 53→55頁

坑夫(十九) 其の内同じ車室に乗 第九二八五号 (八) 面

1月19日「日曜」→遺墨集(19) 56頁→集成⑲ 49頁→ゆま

に版(十九) 41頁→岩波版十九 55→57頁

坑夫(二十) 第一には大道砥の如 第九二八六号 (五) 面

1月20日「月曜」→遺墨集(20) 56頁→集成⑳ 49頁→ゆま

に版(二十) 43頁→岩波版二十 57→60頁

坑夫(二十一) 見ると日はもう傾き 第九二八七号 (五) 面

1月21日「火曜」→遺墨集(21) 56頁→集成㉑ 49頁→

ゆまに版(二十一) 44頁→岩波版二十一 60→62頁

坑夫(二十二) 自分は空腹を自白し 第九二八八号 (八) 面

面 1月22日「水曜」→遺墨集⁽²²⁾ 56頁→集成⁽²²⁾ 49頁→
 ゆまに版^(二十二) 46頁→岩波版^(二十二) 63頁→65頁
 坑夫^(二十三) 其の当時自分には丈 第九二八九号 (四)
 面 1月23日「木曜」→遺墨集⁽²³⁾ 56頁→集成⁽²³⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十三) 49頁→岩波版^(二十三) 65頁→68頁
 坑夫^(二十四) 自分が大に詰らなく 第九二九〇号 (四)
 面 1月24日「金曜」→遺墨集⁽²⁴⁾ 56頁→集成⁽²⁴⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十四) 51頁→岩波版^(二十四) 68頁→70頁
 坑夫^(二十五) さう云ふ訳で、忽ち 第九二九一号 (七)
 面 1月25日「土曜」→遺墨集⁽²⁵⁾ 56頁→集成⁽²⁵⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十五) 52頁→岩波版^(二十五) 71頁→74頁
 坑夫^(二十六) 宿の外れには橋があ 第九二九二号 (四)
 面 1月26日「日曜」→遺墨集⁽²⁶⁾ 56頁→集成⁽²⁶⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十六) 55頁→岩波版^(二十六) 74頁→76頁
 坑夫^(二十七) 小僧の方では、自分 第九二九三号 (五)
 面 1月27日「月曜」→遺墨集⁽²⁷⁾ 56頁→集成⁽²⁷⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十七) 56頁→岩波版^(二十七) 76頁→79頁
 坑夫^(二十八) すると長蔵さんが又 第九二九四号 (八)
 面 1月28日「火曜」→遺墨集⁽²⁸⁾ 56頁→集成⁽²⁸⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十八) 58頁→岩波版^(二十八) 79頁→82頁
 坑夫^(二十九) かう手もなく赤毛布 第九二九五号 (四)
 面 1月29日「水曜」→遺墨集⁽²⁹⁾ 56頁→集成⁽²⁹⁾ 50頁→
 ゆまに版^(二十九) 61頁→岩波版^(二十九) 82頁→85頁

坑夫^(三十) 其のうち路が段々登 第九二九六号 (四) 面
 1月30日「木曜」→遺墨集⁽³⁰⁾ 56頁→集成⁽³⁰⁾ 50頁→ゆま
 に版^(三十) 65頁→岩波版^(三十) 85頁→87頁
 坑夫^(三十一) 此の状態で大分来た 第九二九七号 (七)
 面 1月31日「金曜」→遺墨集⁽³¹⁾ 56頁→集成⁽³¹⁾ 50頁→
 ゆまに版^(三十一) 64頁→岩波版^(三十一) 88頁→90頁
 坑夫^(三十二) すると長蔵さんが、 第九二九八号 (五)
 面 2月1日「土曜」→遺墨集⁽³²⁾ 56頁→集成⁽³²⁾ 50頁→
 ゆまに版^(三十二) 65頁→岩波版^(三十二) 90頁→92頁
 坑夫^(三十三) 同勢は是れで漸く揃 第九二九九号 (四)
 面 2月2日「日曜」→遺墨集⁽³³⁾ 56頁→集成⁽³³⁾ 51頁→
 ゆまに版^(三十三) 66頁→岩波版^(三十三) 93頁→95頁
 坑夫^(三十四) 自分は当時種々の状 第九三〇〇号 (七)
 面 2月3日「月曜」→遺墨集⁽³⁴⁾ 56頁→集成⁽³⁴⁾ 51頁→
 ゆまに版^(三十四) 69頁→岩波版^(三十四) 95頁→98頁
 坑夫^(三十五) 這入つて見るとぶん 第九三〇一号 (五)
 面 2月4日「火曜」→遺墨集⁽³⁵⁾ 56頁→集成⁽³⁵⁾ 51頁→
 ゆまに版^(三十五) 71頁→岩波版^(三十五) 98頁→100頁
 坑夫^(三十六) それから又眠くなつ 第九三〇二号 (七)
 面 2月5日「水曜」→遺墨集⁽³⁶⁾ 56頁→集成⁽³⁶⁾ 51頁→
 ゆまに版^(三十六) 72頁→岩波版^(三十六) 101頁→103頁
 坑夫^(三十七) 土間へ下りた以上は 第九三〇三号 (八)
 面 2月6日「木曜」→遺墨集⁽³⁷⁾ 56頁→集成⁽³⁷⁾ 51頁→

ゆまに版(三十七) 74頁↓岩波版三十七 103↓106頁

坑夫(三十八) 夫れから長蔵さんが 第九三〇四号(七)

面 2月7日「金曜」↓遺墨集(38) 56頁↓集成(38) 51頁↓

ゆまに版(三十八) 77頁↓岩波版三十八 107↓109頁

坑夫(三十九) 自分は雲に埋まつて 第九三〇五号(四)

面 2月8日「土曜」↓遺墨集(39) 56頁↓集成(39) 51頁↓

ゆまに版(三十九) 79頁↓岩波版三十九 109↓112頁

坑夫(四十) それから四人揃つて 第九三〇六号(四) 面

2月9日「日曜」↓遺墨集(40) 56頁↓集成(40) 51頁↓ゆま

に版(四十) 81頁↓岩波版四十 112↓114頁

坑夫(四十一) さう云ふ訳で飯場の 第九三〇七号(七)

面 2月10日「月曜」↓遺墨集(41) 57頁↓集成(41) 52頁↓

ゆまに版(四十一) 82頁↓岩波版四十一 114↓117頁

坑夫(四十二) 飯場頭と云ふのは一 第九三〇八号(五)

面 2月11日「火曜」↓遺墨集(42) 57頁↓集成(42) 52頁↓

ゆまに版(四十二) 85頁↓岩波版四十二 117↓119頁

坑夫(四十三) 「僕は——僕は——」 第九三〇九号(五) 面

2月12日「水曜」↓遺墨集(43) 57頁↓集成(43) 52頁↓ゆま

に版(四十三) 85頁↓岩波版四十三 119↓122頁

坑夫(四十四) 弱輩な自分には此の 第九三一〇号(四)

面 2月13日「木曜」↓遺墨集(44) 57頁↓集成(44) 52頁↓

ゆまに版(四十四) 87頁↓岩波版四十四 122↓125頁

坑夫(四十五) こんな押問答を二三 第九三一一号(四)

面 2月14日「金曜」↓遺墨集(45) 57頁↓集成(45) 52頁↓

ゆまに版(四十五) 89頁↓岩波版四十五 125↓127頁

坑夫(四十六) 「ぢやね」——原さ 第九三一二号(四) 面

2月15日「土曜」↓遺墨集(46) 57頁↓集成(46) 52頁↓ゆま

に版(四十六) 90頁↓岩波版四十六 128↓130頁

坑夫(四十七) そこで原さんの云ふ 第九三二三号(四)

面 2月16日「日曜」↓遺墨集(47) 57頁↓集成(47) 52頁↓

ゆまに版(四十七) 92頁↓岩波版四十七 130↓133頁

坑夫(四十八) 此の時婆さんが後を 第九三三四号(七)

面 2月17日「月曜」↓遺墨集(48) 57頁↓集成(48) 52頁↓

ゆまに版(四十八) 95頁↓岩波版四十八 133↓136頁

坑夫(四十九) それは何方にしたつ 第九三一五号(八)

面 2月18日「火曜」↓遺墨集(49) 57頁↓集成(49) 53頁↓

ゆまに版(四十九) 97頁↓岩波版四十九 136↓138頁

坑夫(五十) 「何故斯んな所へ来 第九三三六号(八) 面

2月19日「水曜」↓遺墨集(50) 57頁↓集成(50) 53頁↓ゆま

に版(五十) 98↓99頁↓岩波版五十 138↓141頁

坑夫(五十二) 此の形勢が此の儘で 第九三一七号(八)

面 2月20日「木曜」↓遺墨集(51) 57頁↓集成(51) 53頁↓

ゆまに版(五十二) 100頁↓岩波版五十一 141↓144頁

坑夫(五十二) 自分は嘲弄のうちに 第九三一八号(八)

面 2月21日「金曜」↓遺墨集(52) 57頁↓集成(52) 53頁↓

ゆまに版(五十二) 102頁↓岩波版五十二 144↓147頁

坑夫(五十三) 「おい金公は居ねえ 第九三一九号 (八)

面 2月22日「土曜」→遺墨集(53) 57頁→集成(53) 53頁→

ゆまに版(五十三) 105頁→岩波版五十三 147→149頁

坑夫(五十四) 此の時曇つた空が、 第九三二〇号 (四)

面 2月23日「日曜」→遺墨集(54) 57頁→集成(54) 53頁→

ゆまに版(五十四) 107頁→岩波版五十四 150→153頁

坑夫(五十五) 此の時さつきの病人 第九三二一号 (七)

面 2月24日「月曜」→遺墨集(55) 57頁→集成(55) 53頁→

ゆまに版(五十五) 108頁→岩波版五十五 153→155頁

坑夫(五十六) 「飯でも食ふべえ」 第九三二三号 (四)面

2月25日「火曜」→遺墨集(56) 57頁→集成(56) 53頁→ゆま

に版(五十六) 111頁→岩波版五十六 156→158頁

名取春仙 『三四郎』挿絵

『三四郎』挿絵(題字カット) 百十四枚は「東京朝日新聞」

(東京朝日新聞社) 第七九一三号、一九〇八(明治四十二)

年九月一日「火曜」から、同第八〇二九号、一九〇八(明治

四十二)年十二月二十九日「火曜」にわたり連載された『三

四郎』(一)→(百十七)に掲載されたものである。ただし

九月二十四日「木曜」・十一月四日「水曜」・十一月二十四日

「火曜」の三日は新聞休刊日である。また四の二(第三十回、

十月一日「木曜」、第七九四二号)・四の三(第三十一回、十

月二日「金曜」、第七九四三三号)・六の十三(第六十八回、

十一月九日「月曜」、第七九八〇号)には挿絵は掲載されて

いない。また十二の一(第百十回、十二月二十二日「火曜」、

第八〇二三号)・十二の二(第百十一回、十二月二十三日「水

曜」、第八〇二三号)には挿絵はないが同じ題字カットが使

われている。同カットは十二の一(十二月二十二日「火曜」)

から十三(十二月二十九日「火曜」)にかけて使用されている。

なお同時期に「大阪朝日新聞」に連載されていた『三四郎』

(一)→(百十七)「第九五一一号」→第九六三〇号、大阪朝日

新聞社、一九〇八(明治四十二)年九月一日「火曜」→十二

月二十九日「火曜」には挿絵は掲載されていない。

↓『デモ画集 戌の巻』収録 165→182頁「一の四 165頁上段

／一の七 165頁下段／二の一 166頁上段／二の二

166頁下段／二の六 167頁上段／三の二 167頁下段／三

の八 168頁／三の十 169頁／三の九 170頁／四の五

171頁／四の七 172頁／四の十二 173頁／四の十四

174頁上段／四の十六 174頁下段／五の八 175頁／八

の一 176頁上段／八の十 176頁下段／九の三 177頁

上段／九の六 177頁下段／九の九 178頁上段／九の

八 178頁下段」如山堂書店 10(明治43)年8月10日

↓『夏目漱石遺墨集別冊』収録 漱石の新聞小説題字カット

挿画一覧 49→69頁 三四郎 51→55頁 石崎 等・中島

国彦・芳賀 徹・紅野敏郎・内田道雄・古川 久著 求龍

堂 '80 (昭和55) 年3月25日

↓『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』収録「三四郎」挿絵① 1〜13 54頁下段〜67頁 堀部功夫・村田好哉編 桜楓社 '91 (平成3) 年12月10日

↓『漱石新聞小説復刻全集第三巻三四郎』収録 三四郎(一) (百十七) 8〜241頁 監修者山下浩 ゆまに書房 '99 (平成11) 年9月24日

↓『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁶ 明治41年9月 自七九一三
号至七九四一号 収録 第Ⅲ期第5回配本 (186) (189) 全八冊 日本図書センター '00 (平成12) 年8月25日

『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁷ 明治41年10月 自七九四二
号至七九七二号 収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁸ 明治41年11月 自七九七三
号至八〇〇〇号 収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁹ 明治41年12月 自八〇〇一
号至八〇三二号 収録 同右

本書誌では『三四郎』挿絵に関する書誌事項を①「東京朝日新聞」、②『夏目漱石遺墨集別冊』(求龍堂)、③『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』(桜楓社)、④『漱石新聞小説復刻全集第三巻三四郎』(ゆまに書房)、⑤『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁶ (〜¹⁸⁹) 明治41年9月 (〜12月) 自七九一三号 (至八〇三二号) 収録(日本図書センター) につい

て以下掲げる。

なお初出紙である①「東京朝日新聞」については各回冒頭の九字分を参考までに記した上で、必要な書誌事項を掲げた。②については ↓遺墨集、③については ↓集成、④については ↓ゆまに版、⑤については ↓朝日版¹⁸⁶ (〜¹⁸⁹) と各々略記した上で、挿絵の再録状況を明らかにするために当該の章、節の数字及び挿絵掲載のページ数を各末尾に掲げた。また利用者の便宜を図るために⑥『漱石全集第五巻坑夫・三四郎』(岩波書店、一九九四[平成六]年四月十一日)の該当する章、節の数字及びページ数を ↓岩波版 と略記した上で掲げた。

三四郎(第一回) 一の うとくとして眼が「東京朝日新聞」第七九二三号 (五) 面 東京朝日新聞社 '08 (明治41) 年9月1日「火曜」↓『夏目漱石遺墨集別冊』求龍堂 三四郎(1の1) 51頁↓『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』桜楓社 「三四郎」挿絵①—1 54頁↓『漱石新聞小説復刻全集第三巻三四郎』ゆまに書房 三四郎挿絵一の一 8〜9頁↓『朝日新聞〈復刻版〉』明治編¹⁸⁶ 明治41年9月 日本図書センター 三四郎挿絵一の一 5頁↓『漱石全集第五巻坑夫・三四郎』岩波書店 三四郎一の一 273〜275頁

三四郎(第二回) 一の二 爺さんに続いて下り 第七九一四

号(五)面 9月2日「水曜」↓遺墨集(1の2) 51頁
 ↓集成 ①—2 54頁↓ゆまに版一の二 10(11)頁↓
 朝日版¹⁸⁶一の二 13頁↓岩波版一の二 275(278)頁
 三四郎(第三回) 一の三 大きな行李は新橋迄 第七九一五
 号(五)面 9月3日「木曜」↓遺墨集(1の3) 51頁↓
 集成 ①—3 54頁↓ゆまに版一の三 12(13)頁↓朝
 日版¹⁸⁶一の三 21頁↓岩波版一の三 278(280)頁
 三四郎(第四回) 一の四 そこへ下女が床を延 第七九一六
 号(五)面 9月4日「金曜」↓遺墨集(1の4) 51頁↓
 集成 ①—4 55頁↓ゆまに版一の四 14(15)頁↓朝
 日版¹⁸⁶一の四 29頁↓岩波版一の四 280(282)頁
 三四郎(第五回) 一の五 三四郎は此男に見ら 第七九一七
 号(五)面 9月5日「土曜」↓遺墨集(1の5) 51頁
 ↓集成 ①—5 55頁↓ゆまに版一の五 16(17)頁↓
 朝日版¹⁸⁶一の五 37頁↓岩波版一の五 283(285)頁
 三四郎(第六回) 一の六 男はしきりに烟草を 第七九一八
 号(三)面 9月6日「日曜」↓遺墨集(1の6) 51頁↓
 集成 ①—6 55頁↓ゆまに版一の六 18(19)頁↓朝日
 版¹⁸⁶一の六 43頁↓岩波版一の六 285(287)頁
 三四郎(第七回) 一の七 其男の説によると、第七九一九号
 (五)面 9月7日「月曜」↓遺墨集(1の7) 51頁↓集
 成①—7 55頁↓ゆまに版一の七 20(21)頁↓朝日版
¹⁸⁶一の七 53頁↓岩波版一の七 287(290)頁

三四郎(第八回) 一の八 浜松で二人とも申し 第七九二〇
 号(五)面 9月8日「火曜」↓遺墨集(1の8) 51頁↓
 集成①—8 55頁↓ゆまに版一の八 22(23)頁↓朝日
 版¹⁸⁶一の八 61頁↓岩波版一の八 290(292)頁
 三四郎(第九回) 二の一 三四郎が東京で驚ろ 第七九二一
 号(五)面 9月9日「水曜」↓遺墨集(2の1) 51頁↓
 集成 ②—1 55頁↓ゆまに版二の一 24(25)頁↓朝
 日版¹⁸⁶二の一 69頁↓岩波版二の一 293(295)頁
 三四郎(第十回) 二の二 あくる日は平生より 第七九二二
 号(三)面 9月10日「木曜」↓遺墨集(2の2) 51頁
 ↓集成 ②—2 55頁↓ゆまに版二の二 26(27)頁↓朝
 日版¹⁸⁶二の二 75頁↓岩波版二の二 295(297)頁
 三四郎(第十一回) 二の三 其時野々宮君は三四 第七九二
 三号(五)面 9月11日「金曜」↓遺墨集(2の3) 51
 頁↓集成②—3 55頁↓ゆまに版二の三 28(29)頁↓
 朝日版¹⁸⁶二の三 85頁↓岩波版二の三 298(300)頁
 三四郎(第十二回) 二の四 不図眼を上げると、第七九二四
 号(五)面 9月12日「土曜」↓遺墨集(2の4) 51頁
 ↓集成②—4 55頁↓ゆまに版二の四 30(31)頁↓朝日版
¹⁸⁶二の四 93頁↓岩波版二の四 300(303)頁
 三四郎(第十三回) 二の五 三四郎は花から眼を 第七九二
 五号(五)面 9月13日「日曜」↓遺墨集(2の5) 51
 頁↓集成②—5 56頁↓ゆまに版二の五 32(33)頁↓朝日

版¹⁸⁶ 二の五 101頁↓岩波版二の五 303↓305頁

三四郎(第十四回) 二の六 二人はベルツの銅像 第七九二

六号 (五) 面 9月14日「月曜」↓遺墨集(2の6) 51

頁↓集成²—6 56頁↓ゆまに版二の六 34↓35頁↓朝日

版¹⁸⁶ 二の六 109頁↓岩波版二の六 306↓308頁

三四郎(第十五回) 三の一 学年は九月十一日に 第七九二

七号 (五) 面 9月15日「火曜」↓遺墨集(3の1) 51

頁↓集成³—1 56頁↓ゆまに版三の一 36↓(37)頁↓

朝日版¹⁸⁶ 三の一 117頁↓岩波版三の一 308↓310頁

三四郎(第十六回) 三の二 夫から約十日許立て 第七九二

八号 (五) 面 9月16日「水曜」↓遺墨集(3の2) 51

頁↓集成³—2 56頁↓ゆまに版三の二 38↓39頁↓朝日

版¹⁸⁶ 三の二 125頁↓岩波版三の二 310↓313頁

三四郎(第十七回) 三の三 其日は何となく気が 第七九二

九号 (五) 面 9月17日「木曜」↓遺墨集(3の3) 51

頁↓集成³—3 56頁↓ゆまに版三の三 40↓41頁↓朝日

版¹⁸⁶ 三の三 133頁↓岩波版三の三 313↓315頁

三四郎(第十八回) 三の四 それから当分の間三 第七九三

〇号 (五) 面 9月18日「金曜」↓遺墨集(3の4) 51

頁↓集成³—4 56頁↓ゆまに版三の四 42↓(43)頁↓

朝日版¹⁸⁶ 三の四 141頁↓岩波版三の四 315↓318頁

三四郎(第十九回) 三の五 其翌日から三四郎は 第七九三

一号 (五) 面 9月19日「土曜」↓遺墨集(3の5) 52

一〇

頁↓集成³—5 56頁↓ゆまに版三の五 44↓45頁↓朝日

版¹⁸⁶ 三の五 149頁↓岩波版三の五 318↓320頁

三四郎(第二十回) 三の六 其日は葡萄酒の景気 第七九三

二号 (五) 面 9月20日「日曜」↓遺墨集(3の6) 52

頁↓集成³—6 56頁↓ゆまに版三の六 46↓47頁↓朝日

版¹⁸⁶ 三の六 157頁↓岩波版三の六 320↓323頁

三四郎(第二十一回) 三の七 其翌日は丁度日曜な 第七九

三三号 (五) 面 9月21日「月曜」↓遺墨集(3の7)

52頁↓集成³—7 56頁↓ゆまに版三の七 48↓49頁↓朝

日版¹⁸⁶ 三の七 165頁↓岩波版三の七 323↓326頁

三四郎(第二十二回) 三の八 三四郎は澄してゐる 第七九

三四号 (五) 面 9月22日「火曜」↓遺墨集(3の8)

52頁↓集成³—8 57頁↓ゆまに版三の八 50↓51頁↓朝

日版¹⁸⁶ 三の八 173頁↓岩波版三の八 326↓329頁

三四郎(第二十三回) 三の九 飯が済むと下女は台 第七九

三五号 (五) 面 9月23日「水曜」↓遺墨集(3の9)

52頁↓集成³—9 57頁↓ゆまに版三の九 52↓53頁↓朝

日版¹⁸⁶ 三の九 181頁↓岩波版三の九 329↓331頁

三四郎(第二十四回) 三の十 五六間行くか行かな 第七九

三六号 (五) 面 9月25日「金曜」↓遺墨集(3の10)

52頁↓集成³—10 57頁↓ゆまに版三の十 54↓55頁↓朝

日版¹⁸⁶ 三の十 189頁↓岩波版三の十 331↓334頁

三四郎(第二十五回) 三の十一 寐慣ない所に寐た床 第七

九三七号 (五) 面 9月26日「土曜」↓遺墨集 (3の11)

52頁↓集成③—11 57頁↓ゆまに版三の十一 56↓57頁↓

朝日版¹⁸⁶ 三の十一 197頁↓岩波版三の十一 334↓336頁

三四郎 (第二十六回) 三の十二 三四郎は新しい四 第七

九三八号 (五) 面 9月27日「日曜」↓遺墨集 (3の12)

52頁↓集成③—12 57頁↓ゆまに版三の十二 58↓59頁↓

朝日版¹⁸⁶ 三の十二 205頁↓岩波版三の十二 336↓338頁

三四郎 (第二十七回) 三の十三 戸の後へ廻つて、始 第七

九三九号 (五) 面 9月28日「月曜」↓遺墨集 (3の13)

52頁↓集成③—13 57頁↓ゆまに版三の十三 60↓61頁↓

朝日版¹⁸⁶ 三の十三 213頁↓岩波版三の十三 339↓341頁

三四郎 (第二十八回) 三の十四 女はやがて元の通り 第七

九四〇号 (五) 面 9月29日「火曜」↓遺墨集 (3の14)

52頁↓集成③—14 57頁↓ゆまに版三の十四 62↓(63)

頁↓朝日版¹⁸⁶ 三の十四 221頁↓岩波版三の十四 341↓344

頁

三四郎 (第二十九回) 四の一 三四郎の魂がふわつ 第七九

四一号 (五) 面 9月30日「水曜」↓遺墨集 (4の1)

52頁 ↓集成④—1 57頁↓ゆまに版四の一 64↓(65)

頁↓朝日版¹⁸⁶ 四の一 229頁↓岩波版四の一 344↓346頁

三四郎 (第三十回) 四の二 ある日の午後三四郎 第七九四

二号 (三) 面 10月1日「木曜」↓遺墨集 (4の2) 52

頁↓集成④—2 (57) 頁↓ゆまに版四の二 (66↓67) 頁↓

朝日版¹⁸⁷ 四の二 (3) 頁↓岩波版四の二 347↓349頁 挿
絵なし

三四郎 (第三十一回) 四の三 横町を後へ引き返し 第七九

四三号 (五) 面 10月2日「金曜」↓遺墨集 (4の3)

52頁↓集成④—3 (57) 頁↓ゆまに版四の三 (68↓69)

頁↓朝日版¹⁸⁷ 四の三 (13) 頁↓岩波版四の三 349↓352

頁 挿絵なし

三四郎 (第三十二回) 四の四 それから三人は元の 第七九

四四号 (五) 面 10月3日「土曜」↓遺墨集 (4の4)

52頁↓集成④—4 58頁↓ゆまに版四の四 70↓71頁↓朝

日版¹⁸⁷ 四の四 21頁↓岩波版四の四 352↓355頁

三四郎 (第三十三回) 四の五 翌日学校へ出て見る 第七九

四五号 (五) 面 10月4日「日曜」↓遺墨集 (4の5)

52頁↓集成④—5 58頁↓ゆまに版四の五 72↓73頁↓朝

日版¹⁸⁷ 四の五 29頁↓岩波版四の五 356↓358頁

三四郎 (第三十四回) 四の六 そのうち与次郎の尻 第七九

四六号 (五) 面 10月5日「月曜」↓遺墨集 (4の6)

52頁↓集成④—6 58頁↓ゆまに版四の六 74↓75頁↓朝

日版¹⁸⁷ 四の六 37頁↓岩波版四の六 358↓361頁

三四郎 (第三十五回) 四の七 与次郎の帰つたのは 第七九

四七号 (五) 面 10月6日「火曜」↓遺墨集 (4の7)

52頁↓集成④—7 58頁↓ゆまに版四の七 76↓77頁↓朝

日版¹⁸⁷ 四の七 45頁↓岩波版四の七 361↓363頁

三四郎(第三十六回) 四の八 三四郎には三つの世 第七九
 四八号 (五) 面 10月7日「水曜」↓遺墨集(4の8)
 52頁↓集成④—8 58頁↓ゆまに版四の八 78頁(79)頁
 ↓朝日版⑧ 四の八 53頁↓岩波版四の八 363頁366頁
 三四郎(第三十七回) 四の九 翌日学校へ出ると講 第七九
 四九号 (五) 面 10月8日「木曜」↓遺墨集(4の9)
 52頁↓集成④—9 58頁↓ゆまに版四の九 80頁81頁↓朝
 日版⑧ 四の九 61頁↓岩波版四の九 366頁368頁
 三四郎(第三十八回) 四の十 二方は生垣で仕切つ 第七九
 五〇号 (五) 面 10月9日「金曜」↓遺墨集(4の10)
 52頁↓集成④—10 58頁↓ゆまに版四の十 82頁83頁↓朝
 日版⑧ 四の十 69頁↓岩波版四の十 368頁371頁
 三四郎(第三十九回) 四の十一 名刺には里見美禰子 第七
 九五号 (五) 面 10月10日「土曜」↓遺墨集(4の11)
 52頁↓集成④—11 59頁↓ゆまに版四の十一 84頁85頁↓
 朝日版⑧ 四の十一 77頁↓岩波版四の十一 371頁373頁
 三四郎(第四十回) 四の十二 美禰子が掃くあとを 第七九
 五二号 (五) 面 10月11日「日曜」↓遺墨集(4の12)
 52頁↓集成④—12 59頁↓ゆまに版四の十二 86頁87頁↓
 朝日版⑧ 四の十二 85頁↓岩波版四の十二 373頁377頁
 三四郎(第四十一回) 四の十三 所へ遠くから荷車の 第七
 九五号 (五) 面 10月12日「月曜」↓遺墨集(4の13)
 52頁↓集成④—13 59頁↓ゆまに版四の十三 88頁89頁↓

朝日版⑧ 四の十三 93頁↓岩波版四の十三 377頁380頁
 三四郎(第四十二回) 四の十四 三人は約三十分許根 第七
 九五号 (五) 面 10月13日「火曜」↓遺墨集(4の14)
 52頁↓集成④—14 59頁↓ゆまに版四の十四 90頁91頁↓
 朝日版⑧ 四の十四 101頁↓岩波版四の十四 380頁383頁
 三四郎(第四十三回) 四の十五 二人が書斎から廊下 第七
 九五号 (五) 面 10月14日「水曜」↓遺墨集(4の15)
 52頁↓集成④—15 59頁↓ゆまに版四の十五 92頁93頁↓
 朝日版⑧ 四の十五 109頁↓岩波版四の十五 383頁386頁
 三四郎(第四十四回) 四の十六 広田先生は例によつ 第七
 九五号 (五) 面 10月15日「木曜」↓遺墨集(4の16)
 52頁↓集成④—16 59頁↓ゆまに版四の十六 94頁95頁↓
 朝日版⑧ 四の十六 117頁↓岩波版四の十六 386頁389頁
 三四郎(第四十五回) 四の十七 美禰子は台所へ立つ 第七
 九五号 (五) 面 10月16日「金曜」↓遺墨集(4の17)
 52頁↓集成④—17 59頁↓ゆまに版四の十七 96頁97頁↓
 朝日版⑧ 四の十七 125頁↓岩波版四の十七 389頁392頁
 三四郎(第四十六回) 五の一 門を這入ると、此間 第七九
 五八号 (五) 面 10月17日「土曜」↓遺墨集(5の1)
 52頁↓集成⑤—1 60頁↓ゆまに版五の一 98頁99頁↓朝
 日版⑧ 五の一 133頁↓岩波版五の一 392頁395頁
 三四郎(第四十七回) 五の二 縁側から座敷を見廻 第七九
 五九号 (五) 面 10月18日「日曜」↓遺墨集(5の2)

52頁↓集成⑤—2 60頁↓ゆまに版五の二 100頁(101)頁
↓朝日版⑮ 五の二 141頁↓岩波版五の二 395頁 398頁

三四郎(第四十八回) 五の三 しばらく無言の儘、第七九六

○号 (五) 面 10月19日「月曜」↓遺墨集(5の3) 52

頁↓集成⑤—3 60頁↓ゆまに版五の三 102頁 103頁↓朝日

版⑮ 五の三 149頁↓岩波版五の三 398頁 401頁

三四郎(第四十九回) 五の四 翌日は日曜である。第七九六

一号 (五) 面 10月20日「火曜」↓遺墨集(5の4) 52

頁↓集成⑤—4 60頁↓ゆまに版五の四 104頁 105頁↓朝日

版⑮ 五の四 157頁↓岩波版五の四 401頁 403頁

三四郎(第五十回) 五の五 三四郎は一分かゝら 第七九六

二号 (五) 面 10月21日「水曜」↓遺墨集(5の5) 52

頁↓集成⑤—5 60頁↓ゆまに版五の五 106頁 107頁↓朝日

版⑮ 五の五 165頁↓岩波版五の五 403頁 406頁

三四郎(第五十一回) 五の六 行くに従つて人が多 第七九

六三号 (五) 面 10月22日「木曜」↓遺墨集(5の6)

53頁↓集成⑤—6 60頁↓ゆまに版五の六 108頁 109頁↓朝

日版⑮ 五の六 173頁↓岩波版五の六 406頁 409頁

三四郎(第五十二回) 五の七 漸くの事で、美禰子 第七九

六四号 (五) 面 10月23日「金曜」↓遺墨集(5の7)

53頁↓集成⑤—7 60頁↓ゆまに版五の七 110頁 111頁↓朝

日版⑮ 五の七 181頁↓岩波版五の七 409頁 412頁

三四郎(第五十三回) 五の八 一丁許来た。又橋が 第七九

六五号 (五) 面 10月24日「土曜」↓遺墨集(5の8)

53頁↓集成⑤—8 61頁↓ゆまに版五の八 112頁 113頁↓朝

日版⑮ 五の八 189頁↓岩波版五の八 412頁 414頁

三四郎(第五十四回) 五の九 菊人形で客を呼ぶ声 第七九

六六号 (五) 面 10月25日「日曜」↓遺墨集(5の9)

53頁↓集成⑤—9 61頁↓ゆまに版五の九 114頁 115頁↓

朝日版⑮ 五の九 197頁↓岩波版五の九 414頁 417頁

三四郎(第五十五回) 五の十 三四郎は斯う云ふ場 第七九

六七号 (五) 面 10月26日「月曜」↓遺墨集(5の10)

53頁↓集成⑤—10 61頁↓ゆまに版五の十 116頁 117頁↓朝

日版⑮ 五の十 205頁↓岩波版五の十 417頁 420頁

三四郎(第五十六回) 六の一 号鐘が鳴つて、講師 第七九

六八号 (五) 面 10月27日「火曜」↓遺墨集(6の1)

53頁↓集成⑥—1 61頁↓ゆまに版六の一 118頁 119頁↓朝

日版⑮ 六の一 213頁↓岩波版六の一 420頁 423頁

三四郎(第五十七回) 六の二 段々聞いて見ると、 第七九

六九号 (五) 面 10月28日「水曜」↓遺墨集(6の2)

53頁↓集成⑥—2 61頁↓ゆまに版六の二 120頁 121頁↓朝

日版⑮ 六の二 221頁↓岩波版六の二 423頁 425頁

三四郎(第五十八回) 六の三 講義が終るや否や、 第七九

七〇号 (三) 面 10月29日「木曜」↓遺墨集(6の3)

53頁↓集成⑥—3 61頁↓ゆまに版六の三 122頁 123頁↓朝

日版⑮ 六の三 227頁↓岩波版六の三 425頁 428頁

三四郎(第五十九回) 六の四 能く考へて見ると、 第七九

七一号 (五) 面 10月30日「金曜」↓遺墨集(6の4)

53頁↓集成⑥—4 61頁↓ゆまに版六の四 124↓125頁↓朝

日版¹⁸⁷ 六の四 237頁↓岩波版六の四 428↓431頁

三四郎(第六十回) 六の五 与次郎はやがて、袴 第七九七

二号 (五) 面 10月31日「土曜」↓遺墨集(6の5) 53

頁↓集成⑥—5 61頁↓ゆまに版六の五 126↓127頁↓朝日

版¹⁸⁷ 六の五 245頁↓岩波版六の五 431↓434頁

三四郎(第六十一回) 六の六 与次郎の用事といふ 第七九

七三号 (五) 面 11月1日「日曜」↓遺墨集(6の6)

53頁↓集成⑥—6 61頁↓ゆまに版六の六 128↓129頁↓朝

日版¹⁸⁸ 六の六 5頁↓岩波版六の六 434↓437頁

三四郎(第六十二回) 六の七 木造の廊下を回つて 第七九

七四号 (五) 面 11月2日「月曜」↓遺墨集(6の7)

53頁↓集成⑥—7 62頁↓ゆまに版六の七 130↓131頁↓朝

日版¹⁸⁸ 六の七 13頁↓岩波版六の七 437↓440頁

三四郎(第六十三回) 六の八 やがて珈琲が出る。第七九七

五号 (五) 面 11月3日「火曜」↓遺墨集(6の8) 53

頁↓集成⑥—8 62頁↓ゆまに版六の八 132↓133頁↓朝日

版¹⁸⁸ 六の八 21頁↓岩波版六の八 440↓443頁

三四郎(第六十四回) 六の九 あくる日は予想の如 第七九

七六号 (三) 面 11月5日「木曜」↓遺墨集(6の9)

53頁↓集成⑥—9 62頁↓ゆまに版六の九 134↓135頁↓朝

日版¹⁸⁸ 六の九 29頁↓岩波版六の九 443↓445頁

三四郎(第六十五回) 六の十 三四郎は眼の着け所 第七九

七七号 (三) 面 11月6日「金曜」↓遺墨集(6の10)

53頁↓集成⑥—10 62頁↓ゆまに版六の十 136↓137頁↓朝

日版¹⁸⁸ 六の十 37頁↓岩波版六の十 445↓448頁

三四郎(第六十六回) 六の十一 三四郎は上から、二 第七

九七八号 (五) 面 11月7日「土曜」↓遺墨集(6の11)

53頁↓集成⑥—11 62頁↓ゆまに版六の十一 138↓139頁↓

朝日版¹⁸⁸ 六の十一 47頁↓岩波版六の十一 448↓451頁

三四郎(第六十七回) 六の十二 よし子は、素直に気 第七

九七九号 (五) 面 11月8日「日曜」↓遺墨集(6の12)

53頁↓集成⑥—12 62頁↓ゆまに版六の十二 140↓141頁↓

朝日版¹⁸⁸ 六の十二 55頁↓岩波版六の十二 451↓454頁

三四郎(第六十八回) 六の十三 三四郎は其時始めて 第七

九八〇号 (三) 面 11月9日「月曜」↓遺墨集(6の13)

53頁↓集成⑥—13 (62) 頁↓ゆまに版六の十三 (142↓143)

頁↓朝日版¹⁸⁸ 六の十三 (61) 頁↓岩波版六の十三 454

↓457頁 挿絵なし

三四郎(第六十九回) 七の一 裏から回つて婆さん 第七九

八一号 (五) 面 11月10日「火曜」↓遺墨集(7の1)

53頁↓集成⑦—1 62頁↓ゆまに版七の一 144↓(145) 頁

↓朝日版¹⁸⁸ 七の一 71頁↓岩波版七の一 457↓460頁

三四郎(第七十回) 七の二 三四郎が広田の家へ 第七九八

二号 (五) 面 11月11日「水曜」↓遺墨集(7の2) 53
頁↓集成⑦—2 62頁↓ゆまに版七の二 146 (147) 頁↓

朝日版¹⁸⁸ 七の二 79頁↓岩波版七の二 460 (463) 頁

三四郎(第七十一回) 七の三 「御母さんの云ふ事」 第七九

八三号 (五) 面 11月12日「木曜」↓遺墨集(7の3)

53頁↓集成⑦—3 62頁↓ゆまに版七の三 148 (149) 頁

↓朝日版¹⁸⁸ 七の三 87頁↓岩波版七の三 463 (467) 頁

三四郎(第七十二回) 七の四 其時広田さんは急に 第七九

八四号 (五) 面 11月13日「金曜」↓遺墨集(7の4)

53頁↓集成⑦—4 63頁↓ゆまに版七の四 150 (151) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 七の四 95頁↓岩波版七の四 467 (469) 頁

三四郎(第七十三回) 七の五 広田先生が「君近頃」 第七九

八五号 (五) 面 11月14日「土曜」↓遺墨集(7の5)

53頁↓集成⑦—5 63頁↓ゆまに版七の五 152 (153) 頁

↓朝日版¹⁸⁸ 七の五 103頁↓岩波版七の五 469 (473) 頁

三四郎(第七十四回) 七の六 戸外は寒い。空は高 第七九

八六号 (五) 面 11月15日「日曜」↓遺墨集(7の6)

53頁↓集成⑦—6 63頁↓ゆまに版七の六 154 (155) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 七の六 111頁↓岩波版七の六 473 (476) 頁

三四郎(第七十五回) 八の一 三四郎が与次郎に金 第七九

八七号 (五) 面 11月16日「月曜」↓遺墨集(8の1)

53頁↓集成⑧—1 63頁↓ゆまに版八の一 156 (157) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の一 119頁↓岩波版八の一 476 (479) 頁

三四郎(第七十六回) 八の二 夫から今日に至る迄 第七九

八八号 (五) 面 11月17日「火曜」↓遺墨集(8の2)

53頁↓集成⑧—2 63頁↓ゆまに版八の二 158 (159) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の二 127頁↓岩波版八の二 479 (482) 頁

三四郎(第七十七回) 八の三 運動は着々歩を進め 第七九

八九号 (五) 面 11月18日「水曜」↓遺墨集(8の3)

53頁↓集成⑧—3 63頁↓ゆまに版八の三 160 (161) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の三 135頁↓岩波版八の三 482 (485) 頁

三四郎(第七十八回) 八の四 三四郎は其晩与次郎 第七九

九〇号 (五) 面 11月19日「木曜」↓遺墨集(8の4)

53頁↓集成⑧—4 63頁↓ゆまに版八の四 162 (163) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の四 143頁↓岩波版八の四 485 (487) 頁

三四郎(第七十九回) 八の五 翌日は幸ひ教師が二 第七九

九一号 (五) 面 11月20日「金曜」↓遺墨集(8の5)

53頁↓集成⑧—5 63頁↓ゆまに版八の五 164 (165) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の五 151頁↓岩波版八の五 487 (490) 頁

三四郎(第八十回) 八の六 「佐々木さんが、あ」 第七九九

二号 (五) 面 11月21日「土曜」↓遺墨集(8の6) 53

頁↓集成⑧—6 63頁↓ゆまに版八の六 166 (167) 頁↓朝日

版¹⁸⁸ 八の六 159頁↓岩波版八の六 491 (493) 頁

三四郎(第八十一回) 八の七 二人は半町程無言の 第七九

九三号 (五) 面 11月22日「日曜」↓遺墨集(8の7)

53頁↓集成⑧—7 64頁↓ゆまに版八の七 168 (169) 頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の七 167頁↓岩波版八の七 494↓497頁

三四郎(第八十二回) 八の八 三四郎は又隠袋へ手 第七九

九四号 (五) 面 11月23日「月曜」↓遺墨集(8の8)

54頁↓集成⁹—8 64頁↓ゆまに版八の八 170↓171頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の八 175頁↓岩波版八の八 497↓500頁

三四郎(第八十三回) 八の九 美禰子も三四郎も等 第七九

九五号 (三) 面 11月25日「水曜」↓遺墨集(8の9)

53頁↓集成⁸—9 64頁↓ゆまに版八の九 172↓173頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の九 181頁↓岩波版八の九 500↓503頁

三四郎(第八十四回) 八の十 女は歩を回らして、 第七九

九六号 (五) 面 11月26日「木曜」↓遺墨集(8の10)

54頁↓集成⁸—10 64頁↓ゆまに版八の十 174↓175頁↓朝

日版¹⁸⁸ 八の十 191頁↓岩波版八の十 503↓506頁

三四郎(第八十五回) 九の一 与次郎が勧めるので 第七九

九七号 (五) 面 11月27日「金曜」↓遺墨集(9の1) 54

頁↓集成⁹—1 64頁↓ゆまに版九の一 176↓177頁↓朝日

版¹⁸⁸ 九の一 199頁↓岩波版九の一 506↓509頁

三四郎(第八十六回) 九の二 「野々宮さん光線の 第七九

九八号 (五) 面 11月28日「土曜」↓遺墨集(9の2)

54頁↓集成⁹—2 64頁↓ゆまに版九の二 178↓179頁↓朝

日版¹⁸⁸ 九の二 207頁↓岩波版九の二 509↓512頁

三四郎(第八十七回) 九の三 「それは何う云ふ意 第七九

九九号 (五) 面 11月29日「日曜」↓遺墨集(9の3)

54頁↓集成⁹—3 64頁↓ゆまに版九の三 180↓181頁↓朝

日版¹⁸⁸ 九の三 215頁↓岩波版九の三 512↓515頁

三四郎(第八十八回) 九の四 帰り路に与次郎が三 第八〇

〇〇号 (五) 面 11月30日「月曜」↓遺墨集(9の4) 54

頁↓集成⁹—4 64頁↓ゆまに版九の四 182↓(183)頁↓

朝日版¹⁸⁸ 九の四 223頁↓岩波版九の四 515↓518頁

三四郎(第八十九回) 九の五 翌日も其翌日も三四 第八〇

〇一号 (五) 面 12月1日「火曜」↓遺墨集(9の5)

54頁↓集成⁹—5 64頁↓ゆまに版九の五 184↓(185)頁

↓朝日版¹⁸⁸ 九の五 5頁↓岩波版九の五 518↓521頁

三四郎(第九十回) 九の六 三四郎は其夕方野々 第八〇〇

二号 (五) 面 12月2日「水曜」↓遺墨集(9の6) 54

頁↓集成⁹—6 65頁↓ゆまに版九の六 186↓187頁↓朝日

版¹⁸⁸ 九の六 19頁↓岩波版九の六 521↓524頁

三四郎(第九十一回) 九の七 二人は追分の通りを 第八〇

〇三号 (三) 面 12月3日「木曜」↓遺墨集(9の7)

54頁↓集成⁹—7 65頁↓ゆまに版九の七 188↓189頁↓朝

日版¹⁸⁸ 九の七 25頁↓岩波版九の七 524↓527頁

三四郎(第九十二回) 九の八 「御母さんが心配し 第八〇

〇四号 (五) 面 12月4日「金曜」↓遺墨集(9の8)

54頁↓集成⁹—8 65頁↓ゆまに版九の八 190↓191頁↓朝

日版¹⁸⁸ 九の八 35頁↓岩波版九の八 527↓530頁

三四郎(第九十三回) 九の九 人の通らない軒燈ば 第八〇

○五号 (三) 面 12月5日「土曜」→遺墨集(9の9)
54頁↓集成⑨—9 65頁↓ゆまに版九の九 192↓193頁↓朝
日版¹⁸⁹ 九の九 41頁↓岩波版九の九 530↓534頁

三四郎(第九十四回) 十の一 広田先生が病氣だと 第八〇

○六号 (五) 面 12月6日「日曜」→遺墨集(10の1)
54頁↓集成⑩—1 65頁↓ゆまに版十の一 194↓195頁↓朝
日版¹⁸⁹ 十の一 51頁↓岩波版十の一 534↓537頁

三四郎(第九十五回) 十の二 「朽ちざる墓に眠り 第八〇

○七号 (五) 面 12月7日「月曜」→遺墨集(10の2)
54頁↓集成⑩—2 65頁↓ゆまに版十の二 196↓197頁↓朝
日版¹⁸⁹ 十の二 59頁↓岩波版十の二 537↓540頁

三四郎(第九十六回) 十の三 玄関には美禰子の下 第八〇

○八号 (五) 面 12月8日「火曜」→遺墨集(10の3)
54頁↓集成⑩—3 65頁↓ゆまに版十の三 198↓199頁↓朝
日版¹⁸⁹ 十の三 67頁↓岩波版十の三 540↓542頁

三四郎(第九十七回) 十の四 「又苦しくなつた様 第八〇

○九号 (五) 面 12月9日「水曜」→遺墨集(10の4)
54頁↓集成⑩—4 65頁↓ゆまに版十の四 200↓(201)頁
↓朝日版¹⁸⁹ 十の四 75頁↓岩波版十の四 542↓545頁

三四郎(第九十八回) 十の五 三四郎は此機会を利 第八〇

一〇号 (五) 面 12月10日「木曜」→遺墨集(10の5)
54頁↓集成⑩—5 65頁↓ゆまに版十の五 202↓203頁↓朝
日版¹⁸⁹ 十の五 83頁↓岩波版十の五 545↓548頁

三四郎(第九十九回) 十の六 「かう遣つて毎日描 第八〇

一一号 (五) 面 12月11日「金曜」→遺墨集(10の6)
54頁↓集成⑩—6 66頁↓ゆまに版十の六 204↓205頁↓朝
日版¹⁸⁹ 十の六 91頁↓岩波版十の六 548↓551頁

三四郎(第一百回) 十の七 三四郎は此画家の話 第八〇一二

号 (五) 面 12月12日「土曜」→遺墨集(10の7) 54頁
↓集成⑩—7 66頁↓ゆまに版十の七 206↓207頁↓朝日版
¹⁸⁹ 十の七 99頁↓岩波版十の七 551↓554頁

三四郎(第一百一回) 十の八 やがて、女の方から 第八〇一

三号 (五) 面 12月13日「日曜」→遺墨集(10の8) 54
頁↓集成⑩—8 66頁↓ゆまに版十の八 208↓209頁↓朝日
版¹⁸⁹ 十の八 107頁↓岩波版十の八 554↓557頁

三四郎(第一百二回) 十一の一 此頃与次郎が学校で 第八〇

一四号 (五) 面 12月14日「月曜」→遺墨集(11の1)
54頁↓集成⑪—1 66頁↓ゆまに版十一の一 210↓211頁↓
朝日版¹⁸⁹ 十一の一 115頁↓岩波版十一の一 558↓560頁

三四郎(第一百三回) 十一の二 万歳を唱へた晩、与 第八〇

一五号 (五) 面 12月15日「火曜」→遺墨集(11の2)
54頁↓集成⑪—2 66頁↓ゆまに版十一の二 212↓213頁↓
朝日版¹⁸⁹ 十一の二 123頁↓岩波版十一の二 560↓563頁

三四郎(第一百四回) 十一の三 「何故、君の名が出 第八〇

一六号 (五) 面 12月16日「水曜」→遺墨集(11の3)
54頁↓集成⑪—3 66頁↓ゆまに版十一の三 214↓215頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の三 131頁↓岩波版十一の三 563頁

三四郎(第百五回) 十一の四 夜中からぐすり寐 第八〇

一七号 (五) 面 12月17日「木曜」↓遺墨集(11の4)

54頁↓集成⁽¹¹⁾—4 66頁↓ゆまに版十一の四 216頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の四 139頁↓岩波版十一の四 566頁

三四郎(第百六回) 十一の五 与次郎は夫なり消え 第八〇

一八号 (五) 面 12月18日「金曜」↓遺墨集(11の5)

54頁↓集成⁽¹¹⁾—5 66頁↓ゆまに版十一の五 218頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の五 147頁↓岩波版十一の五 569頁

三四郎(第百七回) 十一の六 湯から上つて、二人 第八〇

一九号 (五) 面 12月19日「土曜」↓遺墨集(11の6)

54頁↓集成⁽¹¹⁾—6 67頁↓ゆまに版十一の六 220頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の六 155頁↓岩波版十一の六 572頁

三四郎(第百八回) 十一の七 広田先生は夫で話を 第八〇

二〇号 (三) 面 12月20日「日曜」↓遺墨集(11の7)

54頁↓集成⁽¹¹⁾—7 67頁↓ゆまに版十一の七 222頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の七 161頁↓岩波版十一の七 575頁

三四郎(第百九回) 十一の八 「憲法発布は明治二 第八〇

二一号 (三) 面 12月21日「月曜」↓遺墨集(11の8)

54頁↓集成⁽¹¹⁾—8 67頁↓ゆまに版十一の八 224頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十一の八 169頁↓岩波版十一の八 578頁

頁

三四郎(第百十回) 十二の一 演芸会は比較的寒い 第八〇

二二号 (三) 面 12月22日「火曜」↓遺墨集(12の1)

54頁↓集成⁽¹²⁾—1 67頁↓ゆまに版十二の一 226頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十二の一 177頁↓岩波版十二の一 581頁

頁

三四郎(第百十一回) 十二の二 三四郎は、しばらく 第八

〇二三号 (三) 面 12月23日「水曜」↓遺墨集(12の2)

54頁↓集成⁽¹²⁾—2 67頁↓ゆまに版十二の二 228頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十二の二 185頁↓岩波版十二の二 585頁

頁 第百十回(十二の一)と同一の題字カットを使用

三四郎(第百十二回) 十二の三 其傍にゐる男は脊中 第八

〇二四号 (三) 面 12月24日「木曜」↓遺墨集(12の3)

54頁↓集成⁽¹²⁾—3 67頁↓ゆまに版十二の三 230頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十二の三 193頁↓岩波版十二の三 587頁

三四郎(第百十三回) 十二の四 本来は暗い夜である 第八

〇二五号 (三) 面 12月25日「金曜」↓遺墨集(12の4)

55頁↓集成⁽¹²⁾—4 67頁↓ゆまに版十二の四 232頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十二の四 201頁↓岩波版十二の四 590頁

三四郎(第百十四回) 十二の五 「馬鹿だなあ、あん 第八

〇二六号 (三) 面 12月26日「土曜」↓遺墨集(12の5)

55頁↓集成⁽¹²⁾—5 67頁↓ゆまに版十二の五 234頁↓

朝日版⁽¹⁸⁹⁾ 十二の五 209頁↓岩波版十二の五 594頁

三四郎(第百十五回) 十二の六 晩になつて、医者が 第八

〇二七号 (三) 面 12月27日「日曜」↓遺墨集(12の6)

55頁↓集成⑫―6 67頁↓ゆまに版十二の六 236頁↓
朝日版⑮ 十二の六 217頁↓岩波版十二の六 597頁↓601頁

三四郎(第百十六回) 十二の七 三四郎は其日から四 第八

〇二八号 (三) 面 12月28日「月曜」↓遺墨集(12の7)

55頁↓集成⑫―7 67頁↓ゆまに版十二の七 238頁↓239頁↓

朝日版⑮ 十二の七 225頁↓岩波版十二の七 601頁↓604頁

三四郎(第百十七回) 十三(完結) 原口さんの画は出来

第八〇二九号 (三) 面 12月29日「火曜」↓遺墨集(13)

55頁↓集成⑬ 67頁↓ゆまに版十三 240頁↓241頁↓朝日版⑮

十三 233頁↓岩波版十三 605頁↓608頁

平成十七年十月三十一日 原稿受理

大阪産業大学 教養部